

研究分野	資源生態	部名	漁場環境部
研究課題名	アカイカ漁場調査		
予算区分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	S.56 ~ H.17		
担当	清藤 真樹		
協力・分担関係	(独)北海道区水産研究所、遠洋区水産研究所		

### <目的>

太平洋沖合海域に広域に分布するアカイカについて、漁場調査及び海洋観測等を行うことにより漁場探索を行い、群れの分布・回遊状況ならびに生態等を明らかにし、その結果を漁業者に速報することにより、本県の中・大型いか釣り漁業の経営安定に資する。

### <試験研究方法>

東経150度以西海域はアカイカの冬・春生まれが回遊し漁場を形成するものと考えられ、それに伴うパンチング調査における1つのモードの移動が見られるが、今年度12月にモードのばらつきが見られた(図1)。その原因をさぐるため、各調査点ごとの平均外套長と海況の関係から、同海域へのアカイカ回遊条件の一つを明らかにすることとした。

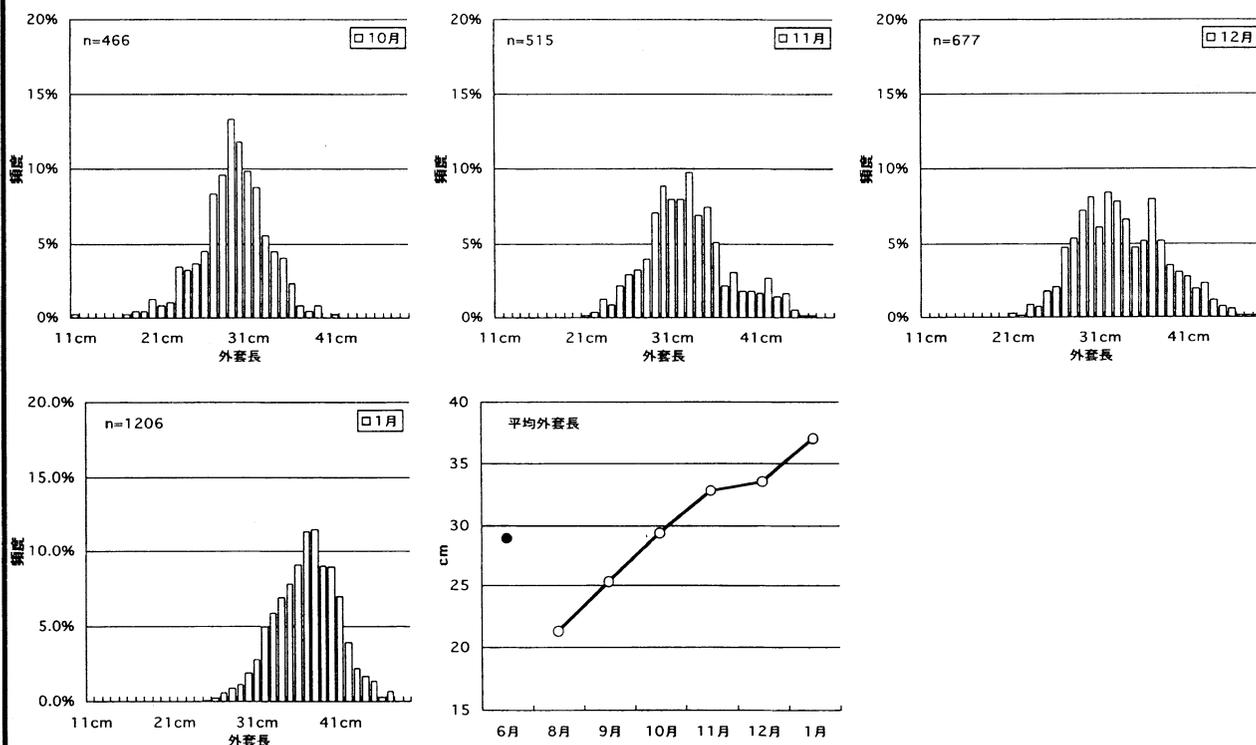


図1 操業別外套長組成及びパンチングからの平均外套長の推移

### <結果の概要・要約>

月別・操業別の平均外套長範囲20~45cmを5cm刻みに5段階に分け、その分布を図2に示した。9月と10月にCPUEの高かった岩手県沖では平均外套長は低く、先に道東沖に回遊したものの他に、暖流の分枝に乗って小さいものが供給されている様子が伺えた。また、早い時期に北上したものについては、成長に伴い表面水温10℃から15℃の混合域

期に入るが、その移行が昨年の11月に比べて1ヶ月遅い12月に見られ、併せて襟裳岬から南下する寒流の分枝に乗って南下する様子が見られた。

11月になっても北緯38度以南に小型のものが見られていることから、かなり遅い時期まで北上回遊が行われており、その時の海況、成長に応じて北上限界が南偏するものと考えられた。

パンチング結果で12月にばらつきが見られたのは、南から回遊してきた小型の個体と南下して来た大型の個体が同じ海域に集中したためと考えられた。

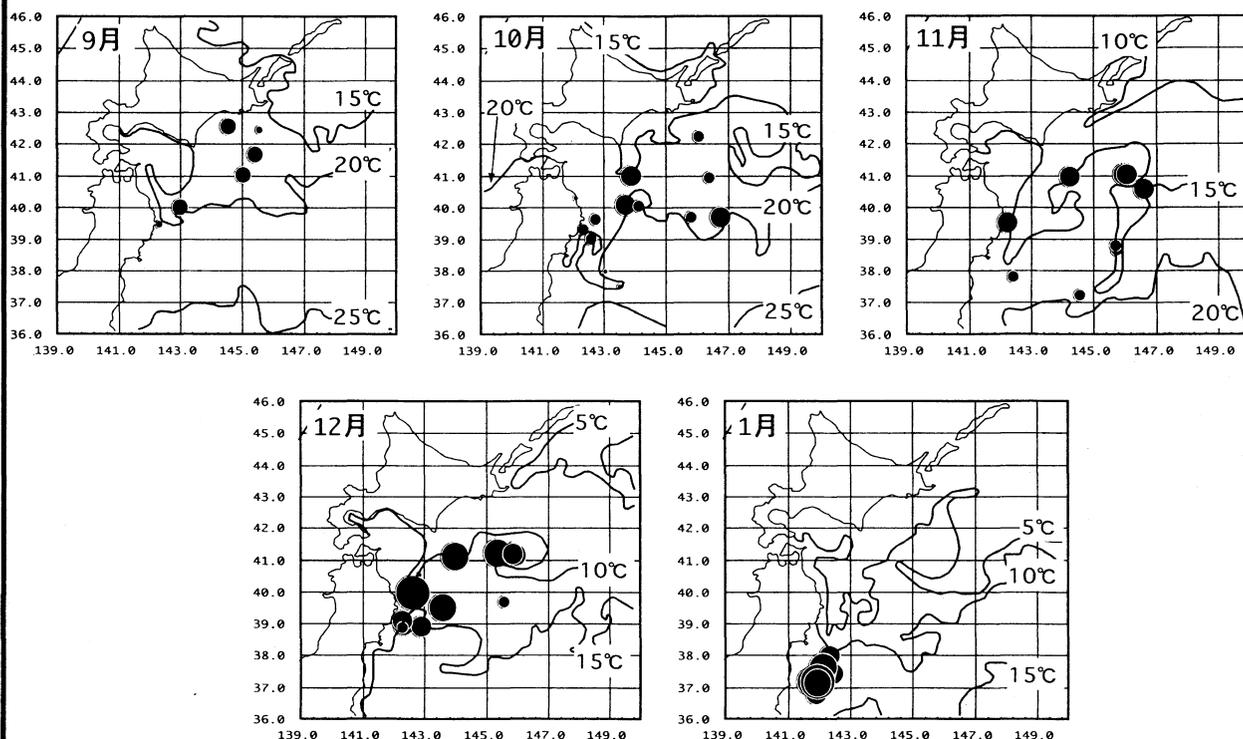


図2 月別・操業別平均外套長と海況の関係

### <今後の問題点>

東経150度以西のアカイカの北上回遊は一時期に起こるのではなく、長期間連続して行われていることが明らかになった。これは、冬・春生まれ群と言われるように長期に渡って産卵・ふ化していることが原因と考えられるが、今年度は遅くまで表面水温15度を前線とした北上期の動態を示す小型個体が見られたことから、同海域への回遊が少ないだけでなく、産卵・ふ化の主期が遅れた可能性が考えられた。産卵海域の環境要因を探ることは容易ではないが、漁場形成時期に直接影響するものと考えられるので、他機関と協力して条件を明らかにしていきたい。

### <次年度の具体的計画>

アカイカ漁場調査、アカイカ南下経路調査を統合し、新たにあかいカ未利用資源の開発調査事業の中で早期の回遊状況、動態等を調査することとしている。

### <結果の発表・活用状況など>

平成17年度イカ釣り漁場開発調査資料31号